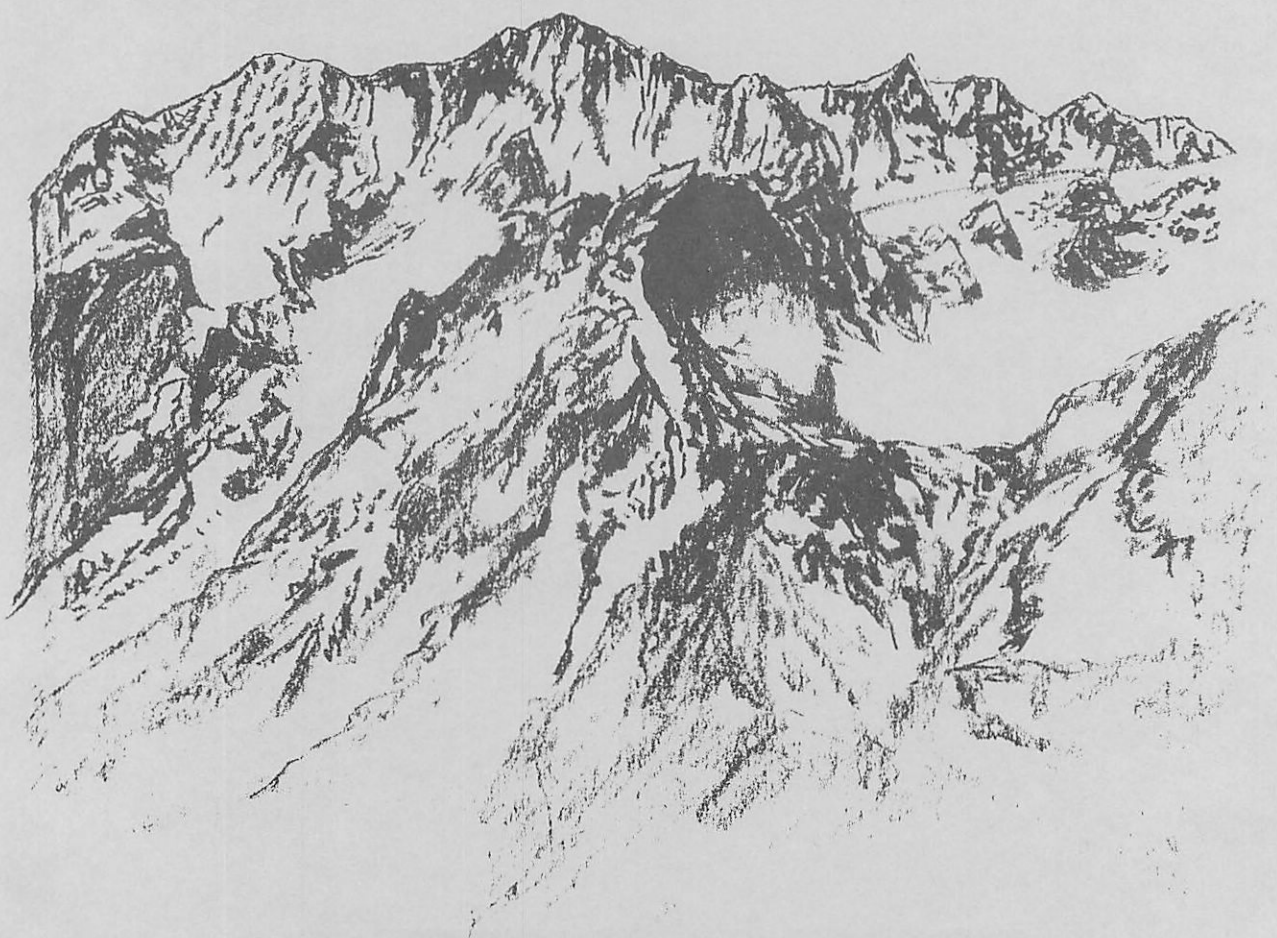


R&V

19号

1995年

秋号10月~12月



R & V

19号



剣沢大滝を登る
95年'秋

《photo by N. Nakamura》

ACC-J 茨城

先日、新聞で谷川岳千回登頂達成の記事を読んだ。この快挙(?)を成し遂げた人は群馬県水上町に住む森邦広さん(60歳)という方である。83年7月から登り始めて95年11月19日に千回に達したという。ザックに「千恵子(奥さん)一番、谷川岳二番」と書いて登っていた。私も何回か会ったことがある。西黒尾根で会ったときは、たしか新潟の三条市に住んでいると言っていたので、その後水上町に引っ越したらしい。水上町に来てからは毎日登っていたとか。いやはや頭の下がる思いである。私はこのおじさんに間接的ではあるが、お世話になったことがある。数年前、九州の友人が谷川岳に登りたいと私の所に遊びに来た。それでは案内しようと出かけて行ったが、あいにくの吹雪で視界がない。その友人はヒマラヤニストで経験技術とも申し分ないので登ることは問題ないが、帰りに肩の広場で迷うことが心配で、行くかやめて温泉にするか迷った。結局行くことにした。予想どおり頂上付近は視界数mだった。でも我々は全然迷うことなく下山できた。それは谷川岳千回の赤旗が50m置きに立てられていたからなのである。同じ山を千回も登るなんて私にはとてもマネはできない。どんな精神力をしているんだろう。人間であれば途中でやめようと思ったことがあるにちがいない。でもそれをやり遂げるということは目的意識が私とは違うのであろう。私には同じ山に千回も登りたいという気持ちもないし、飽きてしまっただけで続かないだろう。森さんの場合は大気汚染とか酸性雨の調査もしていたようだが、ある目標に向かって進んでいるときは精神的にも肉体的にも充実している。なんでも千回登頂は通過点で今度は谷川岳の高度と同じ1963回を目指すという。今はザックになんて書いてあるんだろう。谷川岳1963回と書いてあるんだろうか。今度谷川岳であつたらちょっと話でもしてみたいもんだが。

師走も20日を過ぎ、いろいろと雑用が多くなる頃、一冊の月報準備号なるものが送られてきた。発行クラブは『山岳溪流釣り集団むげん』という会である。会員諸君は“な～んだ釣りのクラブか”と思う人が多いだろう。しかしこのクラブはそんじょそこらにある釣りの会とはちょっとわけが違う。水トレは勿論のこと、岩トレも数多く行っている。一般的にいつて釣り師は魚止までしか遡行しないが、この会は源流から稜線まで抜ける。今までに日本の名渓峻溪を片っ端からものにしている。さらに沢屋もめったに入らない溪まで踏破しており、この会は釣りの会ではなく沢登りの会かと思えるほどである。でもイワナの移植放流などもしているところは、やはり釣りの会なのであろう。「うちは釣りのクラブだから魚のいない溪には行きません。自分達が、より楽しく安全に登るためトレーニングをしているだけです。技術なんて山岳会には足元にも及びませんよ」と、代表の安野氏は言っていたがこれは謙遜。要するに、むげんは山岳もやり溪流もやり釣りもやる集団なのだ。山岳溪流釣り集団むげんではなく、山岳・溪流・釣り・集団・むげんなのだ。やがて岩場のルート開拓や地域研究を、むげんとかいう釣りクラブが行う時代が来るかも知れない。我々もウカウカしてられない心境になってきた。申し遅れたが月報名はNextという。キャッチフレーズのThe Cross point for Nature & Humanは私も大好きだ。人と自然の交差点とはよくつけたものだ。むげんのますますの発展を期待すると共に1月からの月報を読むのが楽しみである。

(本図一統)

《目次》

1995年 秋号10月～12月 ACC-J 茨城

巻頭文	...	1
集会報告	...	3
山行報告	...	4
谷川岳・一の倉沢烏帽子岩・南稜ルート《魔の堅炭尾根》	...	5
谷川岳・東尾根	...	6
八ヶ岳・阿弥陀岳南稜	...	7
剣沢大滝（その2）	...	9
剣岳・荷上げ山行	...	14
妙義山	...	16
コラム	...	18
丹沢・ミクボ沢	...	19
奥多摩・川苔谷・逆川《取材山行》	...	20
太刀岡山・正面壁ルート	...	23
富士山ビパーク訓練	...	24
《雪上訓練》富士山にて	...	25
《ラッセル訓練》谷川岳・田尻尾根	...	26
八ヶ岳・裏同心ルンゼ	...	27
八ヶ岳・大同心正面壁・右ルート	...	29
一流クライマーへの道	...	30
〇〇氏の山談義	...	32
友好団体の月報・会報・その他紹介	...	33
編集後記	...	35

*表紙絵…ポンゲン・ドブク（5930m） by, I, N A M A I

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

【10月】

10月11日

出席者 本図、菊池、古山、告、大崎、笹平、今井

10月25日

出席者 本図、菊池、古山、生井、笹平、今井、大崎

【11月】

11月 8日

出席者 本図、菊池、古山、生井、告、今井、笹平

11月29日

出席者 本図、古山、菊池、笹平、告、坂本、生井、大崎

【12月】

12月 13日

出席者 本図、古山、大崎、坂本、菊池、告、笹平

12月20日

出席者 本図、古山、大崎、告、笹平、生井

山行報告

1995年 10月~12月

【10月】

10月 1日	谷川岳・烏帽子岩南稜ルート	L坂本、今井
10月 1日	谷川岳・東尾根	L古山、笹平
10月 5日	八ヶ岳・阿弥陀岳南稜	L今井、大崎、他1名
10月7~10日	剣大滝	L本図、浦和浪漫3名
10月21~22日	剣岳早月尾根	L古山、笹平
10月26日	表妙義山	L今井、大崎
10月29日	岩トレ御岩山	L本図、笹平

【11月】

11月 3日	《取材山行》丹沢・ミクボ沢	L本図、笹平
11月 5日	《取材山行》奥多摩・逆川	L本図、生井、古山
11月 9日	太刀岡山・正面壁ルート	L本図、古山、告
11月25~26日	富士山	L古山、告
11月26日	《雪上訓練》 富士山	L本図、今井、笹平、大崎

【12月】

12月 3日	松木沢ジャンダルム・岩トレ	L本図、古山、坂本、笹平
12月11日	《ラッセル訓練》谷川岳田尻尾根	L本図、今井、告、笹平、古山
12月23~24日	八ヶ岳・裏同心ルンゼ	L本図、古山
" "	" ・大同心正面壁右ルート	L本図、古山

谷川岳・一の倉沢烏帽子岩・南稜ルート 魔の堅炭尾根

1995. 10. 1

パーティ L坂本昭宏、今井弘

おそらくこれが今年の最後の谷川になるだろうと思っていた。それだけに、いつもより天候も気になったし、気持ちも高ぶっていたような気がする。

気持ちの高ぶりを押さえるには、やはり『酒』であろうか。例のごとくテントの中で好天を折りつつ、ビールで乾杯となった。今回のパートナーは、今井さんである。

南稜は、人気のあるルートだけに混雑が予想された。それだけに5:00には、テントを出たところである。しかし目覚めは遅かった。時すでに、6時であった。今回の山行はまずここで失敗であった。やはり南稜の取り付きでは、順番待ちであった。1時間ぐらい待たせようか、登攀を開始したのは、8時半ぐらいであった。前半の3ピッチは順調であった。4ピッチ目は今井さんである。4ピッチ目は、馬の背リッジに出るところであったが、少々ルートを6ルンゼ寄りにとりすぎてⅢ級のルートがⅥ級のルートになってしまった。岩が脆く、落石があつてとてもいやらしいルートだった。しかし何はともあれ、最終ピッチも難なく登りきり登攀終了したのは11:00を少し回った頃であった。

丁度この頃から雨が降り出した。この雨もあつて、この後のルートをどうしようか、迷ってしまった。このまま6ルンゼを降りるか、それとも一の倉尾根を行って山頂を目指すかである。個人的には一の倉尾根を歩いたことが無かったことと、どうせ最後の谷川だしと云う気持ちもあつて、後者を選択した。今井さんも同調してくださった。ここからは、少々急いだ。気持ちも急いだような気がする。ぐんぐん登って一の倉の山頂には1時に着いた。ここで避難小屋で食事をとって、さあ下山である。ここで2つめの失敗である。堅炭尾根には入れず、蓬峠の方へ歩いてしまった。往復で1時間くらいはロスしたような気がする。完全に僕のミスでした。堅炭尾根の入り口ぐらい直ぐ分かるだろうと楽観的に考えていたが、甘かった。反省しています。

ここで話は終わらず、道を間違った事もあつて、急いだのでしょう、雨に濡れた笹に足を滑らせ足首を捻ってしまいました。これが3つ目の失敗である。今でも覚えているが、痛かったなあ。まあ一の倉沢の出合の遠かったこと。途中まで古山さんと、笹平君が出迎えに来てくれました。嬉しかったなあ。結局つくばに帰って病院での診断の結果剥離骨折ということでした。古山さんに付き添っていただき、とてもお世話になりました。

とにかく、いろいろな意味で多くの反省をさせられた山行でした。今井さん最後まで色々ありがとうございました。

(坂本 記)

谷川岳・東尾根

1995. 10. 1

パーティ L古山正文、笹平孝

早朝、8:00にマチガ沢出合を出発しました。私達の他に沢登りの人達もいました。途中で、沢の水を飲んだら冷たくて美味しかった。

しばらく歩いて行き、シンセン沢の所まで来たが、どの沢がシンセン沢だか分からなくなってしまった。どうも少し登り過ぎてしまったらしい。下るのも勿体無いので、ヤブコギをしてシンセン沢に入った。上部の方で少し迷いながらもシンセンのコルに着いた。

第一岩峰を1ピッチ、第二岩峰を1ピッチで、登攀は終了する。そこから少し行って登山道に出た。国境稜線に出ると、直ぐにおばさんが寄ってきて私達が登ってきたところを見て、驚いていろいろと話しかけてきた。

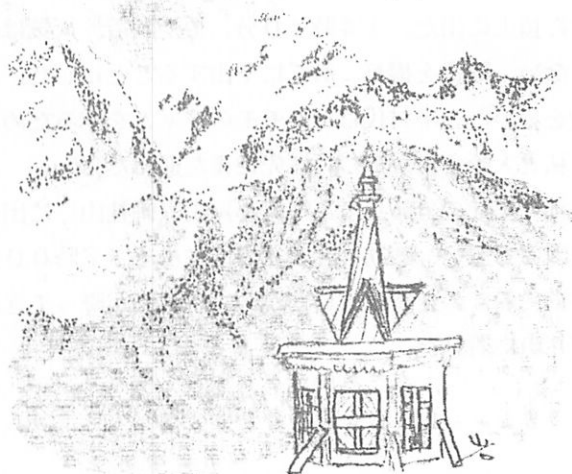
肩の小屋に着いて昼食にする。丁度小屋に入ったら雨が降りだしてきた。下りの時は、岩が濡れていて何回もスリップしながら下りてきた。

コースタイム

マチガ沢出合発(8:00)ーシンセンのコル(10:00)ーオキの耳(11:30)ー肩の小屋(13:30)

ーマチガ沢出合着(4:00)

(笹平 記)



八ヶ岳・阿弥陀岳南稜

1995. 10. 5

パーティ L 今井弘、大崎真奈美、他1名

平日しか休めない大崎さんから『木曜日、休み取れたので何処か連れて行って下さい。』とお誘いと言うか、懇願された。そこまで頼まれてはと、私の英知を駆使してお答えせねばなるまいと色々考えたあげく、何年か前に阿弥陀岳南稜に登った時の事を思い出した。以前登った時は、P1、P2の岩場を登らず、巻いて登った。だからP1、P2の岩場を登りたいのと、大崎さんなら大丈夫だろうと思い、阿弥陀岳南稜に決めた。二人だと心細いので、知人の中村さんにサポートを依頼した。彼は快く引き受けてくれた。

10月4日、午後10時30分常磐自動車道守谷インターから高速に乗り小湊沢で降りた。八ヶ岳美術館の駐車場でテントを張って仮眠をとった。(水洗トイレ付き無料)

翌日、5時30分に起床。7時頃、駐車場を出発した。鉢巻道路を右折して100m位走り、また右折し別荘地を抜けると、以前来た時に駐車したフナヤマ十字路？又は小さな十字路を通った。前はここから歩いた。今日はここからでは無く、車を直進して車止めの所に駐車した。

8時00分、歩き始める。1時間ぐらい歩くと旭小屋の上に出た。“アオナギ”を通り、P2に出た。ここからザイルを出し、私がトップに登り、大崎さんがセカンド、中村氏がラストで登る。P2は難なく登れた。P2を登ると直ぐにP1が現れた。P1も私がトップで登り、セルフビレーを取り、大崎さんのビレーをした。5m位はザイルが動いたが、岩の陰で大崎さんが見えなくなったと同時にザイルが全く動かなくなった。高さは20m位、風は強く10月にしては寒く感じた。下の声が聞こえないまま10分が過ぎ、20分が過ぎ、30分ぐらいして中村氏が『ザイルを下げろ！』と手で合図した。ザイルはするすると下がっていった。結局、大崎さんは巻道を登ってきた。

P1を過ぎると直ぐに頂上に出た。14時40分、頂上到着。天気は曇りで風が強く、近くにあるはずの赤岳も見えない。写真を撮り、直ぐに下山することにした。

下りは、御小屋尾根を歩いた。中村氏はコケモモのジャムを作るため、兎と亀のように先にいったのはコケモモを取り、私と大崎さんが近づけば先にまた進んだ。

美濃戸口方面と諏訪神社奥社の分岐点である御小屋山(御柱山)に出た。我々は国土地理院の25000分の1の地図にも無い、諏訪神社奥社方面に歩き17時00分車道に出て17時45分車に着いた。我々が車に着くのを待っていたかのように雨が降ってきた。帰りにモミの湯に入り、22時30分、岩井市に着いた。

(今井 記)



剣沢大滝（その2）

1995. 10. 7~10

パーティ L 高桑信一、田中恵子、小川春野（浦和浪漫山岳会）

中村成勝（山岳プロカメラマン）、本図一統

8月に続いて2回目のルート工作である。今回は緑の台地まで行く予定だ。これで我々に登攀可能かどうか答えが出せるであろう。

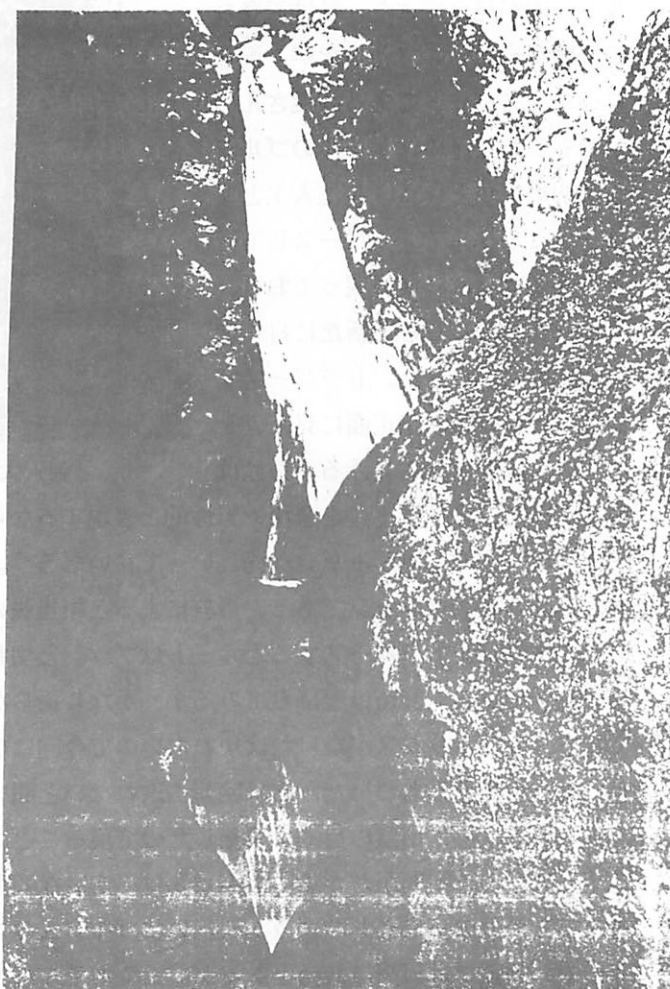
10月7日、晴。昨夜の上信越道の事故渋滞のためか寝不足で食欲がない。相変わらず1番のトロリーバスは混んでいた。見上げる立山は既に白くなっている。やはり10月ともなると朝は寒い。旧日電歩道を十字峡に向かう。現在樺平～宇奈月間が不通なのでハイカーはいないのではと思っていたが結構いるようだ。聞くと阿曾原小屋まで行き、引き返すとのこと。ご苦労様です。旧日電歩道は悪くはないが油断はできない。一歩足を踏み外すと致命的である。白竜峡は何度来ても素晴らしい景観である。十字峡には既に2張りの天幕があった。どうやら剣沢にかなりのパーティが入らしい。小休止後、第一徒渉点の幕営地に向かう。途中志水君に会った。来週テレビの取材で来るので偵察に来たとのことであった（これは11月28日、東京12CHで放映されたそうである。）志水君の話によると大滝に1パーティ取り付いているそうである。第一徒渉点のチロリアンは増水によりボルト支点が抜けていた。前回の時、目につけていた幕営地は風も当たらず快適で、薪はたくさんあるし最高であった。夜は焚火を囲み宴会をする。いつも思うこと



大滝取り付きテラスにて・中村、小川、田中、高桑、本図

だが浦和浪漫の皆さんはとても良く働くと感心した。

8日、晴。本日の予定は焚火のテラスまでのルート整備である。そして念願のテラスにて焚火をしながらピパークと洒落込むつもりである。出発すると大滝見学の人達が数名来ていた。8月と比べると水量はかなり少なく、チロリアンを使う必要はなかった。ゴルジュ入口の難所は前回のフィックスがあるので難無く通過できる。大滝見学の人達はここが登れず大滝を確認できないまま引き返す例が多いと聞く。今日来た人達は全員大滝下まで行けたのはこのザイルのおかげですぞ。I滝下の瀑風も8月とは比べものにならないくらい弱くなっていた。I滝をバックに山溪でおなじみの山岳プロカメラマン、中村さんに記念写真を撮ってもらった。私は山岳プロカメラマンに撮ってもらったというだけで感激してしまった。なにしろ当クラブの山岳報道カメラマンN氏とはちょっと格が違うんだから。この写真は会報に必ず載せて下さいよ編集長様。大滝ルート取付のテラスで中村さん、田中さん、小川さんと別れ、高桑さんと私は焚火のテラスに向かう。まずフィックスザイルほか登攀用具を持って焚火のテラスまで行き、下降してから再びピパーク用具その他を持ち上げるつもりである。4ピッチ登ったところで昨日取付いたパーティが降りてきた。荷物が大きくて登れないとのことであった。ルート工作終了したところで懸垂で降りる。デポしておいた荷物をザックに入れ、すぐに登りかえすも50歳間近の2人には相当きつく、這々の体でテラスに転がり込んだ。本当にそれは転がり込むといった言葉がぴったりの二人であった。薪を集めツエルトを張るとテラスはいっぱいだ。大岩壁に囲まれたこの狭い空間に大滝の瀑音がこだまして改めてスケールの大きさに驚く。ここで酒を酌み交わしながら至福の時を過ごす。焚火のテラスで焚火をしながらピパークをしてみたいという子供じみた夢をとうとう果たしたのである。この時の二人は十代の少年のような気持ちで素直に喜んだ。食事は私の大好きな池田さん特製のカレーであった。忙しい中わざわざ作って



剣沢大滝・D滝

下さった池田さんに心からお礼を言いたい。又、この重い食料と酒をここまで上げてくれた高桑さんに感謝したい。ここで高桑さんの寝付きの良さにはビックリした。さてそろそろ寝ようかと横になって話しをしていたのだが、話が終って3秒もしないうちに高桑さんはイビキをかいて寝てしまったのである。うらやましい。

9日、晴。登攀用具を着け緑の台地に向かう。7mの懸垂をするとゴルジュ内が見えてきた。私は沢登りの経験が少ないので勿論だが、沢登りのエキスパートである高桑さんの話でもこれだけのスケールのゴルジュは初めてだという。左に人工とフリーのミックスでトラバースして行く。残置支点は必要量残っており、チェックをするだけで新たに打ち加える必要はなかった。トラバースするにしがたいD滝が正面に見え、その下にE滝とF滝も見える。D滝は



剣沢大滝・ゴルジュに懸垂する本図

優美な滝で、まさにI滝を豪快で男性的と表現するなら、D滝は美しい曲線美を持った女性的な、そう丁度〇◇△ちゃんみたいな滝といって良いだろう。緑の台地上の急な岩稜は一つの岩登りルートといえる立派なリッジである。資料によると相当脆いらしいのが見る限りすっきりした岩稜に見える。35mトラバースするとルートはブツンと切れる。ここから懸垂なのだ。懸垂といっても振り子である。20mほど降りてみるが、かなり振らないと次の支点には届かない。これを行ってしまうとフィックスがなければ戻れないので今回はここまでとする。大滝完登のノウハウはわかったし、見通しもついた。水は絶対に取れないと聞いていたが、工夫すればなんとかなりそう。これで十分に偵察の目的は果たしたので戻ることにした。戻るといってもユマーリングとトラバースなので時間がかかる。高桑さんは不安定な姿勢で写真を相当数撮っていた。まだ時間があるので焚火のテラスからプッシュ伝いにゴルジュのすぐ上まで降り、G滝とH滝を偵察する。今までの文献ではH滝は20mとあるが、とてもそんな大きさはないように思えた。テラスに装備の一部と食料や酒をデポし下降に移る。第3チロリアンを撤収し、剣沢平で田中さんと小川さん

の出迎えをうける。小休止後、第2チロリアンも撤収しベースに戻った。あとは宴会があるのみ。高桑リーダーの音頭で乾杯し、浪漫流の心づくしの料理に舌鼓を打ちながら気分良く酔った。田中さん、小川さん、ごちそうさまでした。この夜はかなり冷えた。

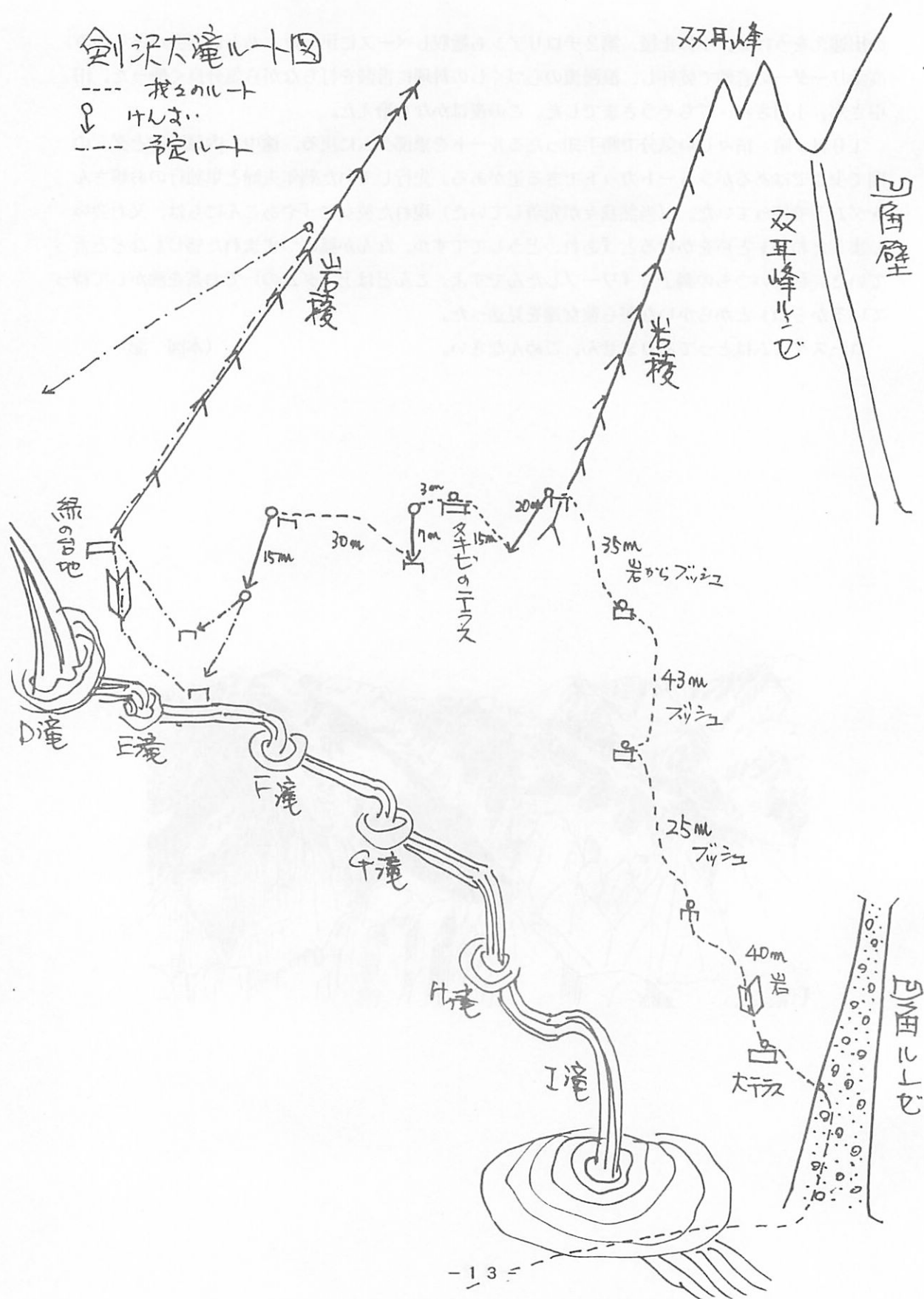
10日、晴。清々しい気分で勝手知ったるルートを黒部ダムに戻る。途中、内蔵助谷とダムの間で少しではあるがショートカットできる道がある。先行していた熟年夫婦と単独行のお嬢さんをダム下で待っていた。（当然我々が先着していた）現れた彼女に『やあこんにちは、又お会いしましたねー』と声をかけると『あれ、どうしてですか。なんか狐につままれた感じ』などと言っていた。私はいつもの調子で『ワープしたんですよ。こんどは上（ダムの）でお茶を沸かして待っているからね』とからかいながら彼女達を見送った。

コースタイムはとってありません。ごめんなさい。

（本図 記）



---- 校舎のルート
 ↓ けんさく
 ---- 予定ルート



剣岳・荷上げ山行

1995. 10. 21~22

パーティ L古山正文、告広道

『ああ～！遠い。本当に遠い』……何で富山ってこんなに遠いんだろう。剣岳と筑波山が入れ替われば良いのに…、と運転しながら考える。だってそうでしょう？、岩登りに行々でもなし、ただ荷上げなんて。ああ、何処かの黒ネコヤマトで“ただ今、荷上げのサービス取り扱い中”なんてのぼりが立っていると嬉しいんだけどなあ、そんな分けないか。そんな事を思っているうちに馬場島に着き、泥のように眠る。

遅い朝を迎え、ヨタヨタと登山道に向かって歩き出す。ザックに入れた一斗缶が重い。何度も何度も休憩をとりながらやっと早月小屋に到着。早速デポに良さそうな場所を探すが、他人に見つからず、冬に見つけやすく出しやすいなんて所はそうザラにあるはずがない。トイレの屋根裏だ、向こうのから松だ、と悩んだ末、結局2本並んだ高さ4m程のから松の根元に縛り付ける。

早月小屋から日本海に沈む夕日を眺めながら酒を飲む。つつい酒が進んでと言いたいところだが寒いのでテントに入り、食事を取って寝る。

次の日、頂上まで偵察に行く。早月小屋から頂上までは過去に事故が多発している。シシカシラなどの難所があるのでよく見ておかななくては。なるほど、無雪期でも結構歩きづらい、ここに雪が着いたら危険な場所になるはずだとうなずける。



剣岳頂上にて…古山氏

頂上に着いたが、本日はとても穏やかで風も全く無い。さかんに剣沢をヘリコプターが飛んでいる。きっとあれはラジオで言っていた行方不明者を探しているのだろう。早く見つければと思いながら頂上を後にする。本日はもう一日早月小屋に泊まろうかと思ったが、日本海の幸を食べたいので下まで降りた。

コースタイム 10/21 馬場島着(3:30)－馬場島発(10:00)－早月小屋着(3:30)
10/22 早月小屋発(7:00)－剣岳頂上(10:00)－早月小屋着(12:00)－馬場島着(3:45)

(告 記)



表妙義山

1995. 10. 26

パーティ L 今井弘、大崎真奈美、その他1名

中ノ岳神社から、もう直ぐ終わりの紅葉の中をしばらく登ると、独特の山姿が眼下になる。遠く車から眺めた時にも、この黒い異形の山に『……………』の私。

次々と景色が変わり、気がつくとも高度が上がっている感じ。息は相変わらず切れていたけれど疲れは感じなかった。

今回私は、鎖場というものを初めて登ることになったが、5～6m位の高さの岩壁にもかかわらざるかなりの時間を費やしてしまった。壁から身体を離すことが出来なくてついつい張り付いてしがみつくと格好になる。そうこうしているうちに腕が上がってきて、あとほんの少しが登れない。ラインを変えてみたり、ムーブを変えたりと何度も試してみたが……。今井さんと同行のM氏のアドバイスも思うように実行できず、後半は無理矢理よじ登った。

その後も、幾つかの鎖場や、2段の壁（ACC-Jの他の皆さんが見たら路面の荒れ位にしか見えないかも）を登る。今井さんにロープの扱い方やビレーのやり方を教わる。

鷹返しというところは、想像した以上の高度で鎖とロープとハシゴが頼りなく張り付いている。この場所が一番緊張した。



無理矢理岩場をよじ登る大崎女史

時間的に日が傾いてくるので、中間道の“関東ふれあいの道”へと向かう。急に辺りは暗くなり焦ってしまう。下山のスピードが登るのに勝るとも劣らないくらい遅い私のお陰で暗闇の中の下山となる。他の二人はさぞかし、イライラされているだろうと思うと顔が見えないのが唯一の救いだった。大砲岩を抜け石門に着く。シルエットしか見えないので、余計巨大に感じられる。

一般道へ出ると、今井さん達が『お疲れ様！よく頑張ったなあ!!』と言って下さったので、身も心も縮小していた私は少しホットした。

夕闇の夜空の星を眺めていると、M氏が双眼鏡を渡してくれた。見るとものすごい密度の星があるのが分かる。その多さにびっくりする。

夜になってしまったのを申し訳なく思う半面、この時間、この場所にいられてうれしく思った。

帰途、同行のM氏に『ろくに岩登りの経験も無いのに、人を当てにしてついて来るなんて』と言われて、当たっているだけに耳が痛かった。（でも、言葉に出して言ってくださった事に感謝しています。……ごく最近になってからですけど）

今回の山行はとても充実していて楽しめた事が実感できました。つきましてはほとぼりの冷めた頃に、今井氏のご機嫌の良い時を狙って再度同行をお願いしようと企んでいる今日この頃です。

(大崎 記)



岩場のピークにて…今井

《コラム》

*ライバル

何事も目標に達するまでの期間（スポーツ、仕事、恋愛等）に色々なライバルが現れると思うが、その目標に達した時、過ぎ去った時間が辛かったと同時に充実していたと感じると思います。ことスポーツに関しては、より自分をストイックにかつ厳しくなりうる事ができるのも良きライバルがいるからだと思います。それも自分と同等かそれ以上の強力なライバルであればある程辛い鍛練も奴に勝つためには、と頑張れるんじゃないかと思います。

山やの世界でもそれは言えると思います。唯たんに山が好きだから登っているのでは、より高みに駆け登るという自己向上欲が薄れてしまうと、自分の能力を伸ばすスピードものんびりになっていずれば停滞してしまうのではないのでしょうか。

それは一方的に自分だけで思っていていいと思います。相手が自分のことは眼中に無くてもあいつだけには負けない、今は眼中に無くても、自分はいずれは一目置く様な存在になってやるぞと。

私も山を始めた頃“Y”がライバルでした。しかし今は、“M”氏がライバルです。これは終わりの無い戦いになりますが、それが私は楽しいと感じます。ですから今まで山に彼らと行っても決して自分から休もうとか、岩場のルート上でも弱音を吐かない。お互い、根競べである。あいつより早く弱音を吐くもんか。と自分を鍛えていくといつの間にか相乗効果で、お互いレベルが上がっていったことになる訳です。だからいつの心の中では『俺も辛いが奴だって辛いはずだと……。』

和気霽愛も良いですけど、そんな感じもいいかな～と思います。好敵手がいてこそ自分もレベルアップするんだと思います。まあ～その時は奴をおもしろく思わないかも知れないけどね。ですから皆さんも、誰かライバルを見つけて充実したときを過ごしてたなあ～と後から思える日々にはしてはどうでしょうか。

（永遠のライバルN 記）

丹沢・ミクボ沢

1995. 11. 3

パーティ L本図一統、笹平孝

ミクボ沢には8月に来たばかりなのだが、白山書房より原稿依頼があったのもう一度登ることにした。なんでも“東京付近の沢”が新版になるらしい。8月の時は右俣を登り本流を降り左俣を登った。今回は本流を登り右俣を降りることにした。ミクボ沢は名前の如く三つの窪で、とても私の頭の中にある沢のイメージとは違う。溝かドブを急傾斜にしたようなものだ。原稿依頼でもなければ何回も入るような所ではない。本流とか左俣とか名前はついているが、私に石原裕次郎という名前を付けたようなもので聞いてははずかしくなる。

前夜、神ノ川ヒュッテの少し先の水場の前で仮眠した。8月の時とは違って朝は冷える。神の川への降り口付近は林道工事中であった。出合で身支度を整え入渓する。ナメを登ると4mだが左を巻く。少し行くと二俣になる。8月は正面のいやらしいルンゼから右俣に入った。今日は左の本流を簡単に登る。やがて本流は右からハング滝で入ってくる。霧状の滝とはこれのことだろうが霧状になってはいない。しょんべん滝といったほうがふさわしい。正面は左俣であるがなんにもないつまらぬ沢だ。20分で風巻尾根に出られるのでエスケープルートには良い。さてこのハング滝はどこから登れば良いんだろう。左のボロボロの被った壁しかルートはとれそうもない。ザイルをつけ、頼りないブッシュに気休めのランニングをとり強引に登る。ボロボロの壁は困難ということではなく、ただ恐いだけだ。あとは小さい滝をいくつか過ぎると後はルンゼ状となって風巻尾根に出た。風巻の頭で小休憩後右俣を降りる。大ガレの上の壁に迷い込んだが、ルートファインディングよろしく脱出する。右俣は二回の懸垂をしたが、他にこれといったものはなく神の川に降り立つ。

コースタイム

出合(8:20)－本流出合の滝上(9:30)－風巻の頭(10:35~10:50)－右俣を下降して神の川本流着(12:50)

(本図 記)

奥多摩・川苔谷・逆川《取材遡行》

1995. 11. 5

パーティ L本図一統、古山正文、生井一男

『ジリ、ジリ、ジリ～ン～！ジリ、ジリ、ジリ～ン～！』と電話がなった。まるで『早よう！出んかい！われえ』と言っているような鳴り方であった。急かされる様に電話に出てみると、やはり本図さんからであった。

『お～い、生井！腰の調子はどうか？良さそうだったら今度の休みに逆川に付き合ってくんねえ～か。取材しなくちゃなんねえ～んだよ。泳ぎはないからさ、水にも余り入らないからよおなア～、一緒に行く相棒がいねえ～んだよ、云々』と本図さん。私はちょっと迷いながら『腰の方は良くなったんですが、歩くのはまだちょっと不安が有るんですよ。』と言うと、間髪を入れず『大丈夫だよ。途中から林道にエスケープ出来るし、駄目だったら途中で止めてもいいし、そんなにキツクナイよ。なあ、なあ、なあ、』と畳み掛けてくる。どうもうまく丸め込まれそうだなと思ながらも結局、大御所の意向には逆らえず、逆川取材に行く事にした。（本当の事を言うと、私は若い時分から本図氏をライバル視していた。彼に出来るんだから俺に出来ないはずはないと。まだまだ到底勝てないが、彼からの誘いは私への挑戦状だと心に誓い、すべて受けてきたのだ。だから、ここで彼に背を向けて逃げる様な真似は出来ない。私は正々堂々と受けて立つ事にしたのだった。）

取材山行に行く事に返事はしたのだが不安は有った。何故かと言うと、私は今年始め1月頃より“椎間板ヘルニア”に侵され、一時は手術入院が必要という重症になってしまった。よくよく整形の先生に相談した結果、（手術したほうが早いとは言われたのだが）半年以上の苦しさを乗り越えれば、自己治癒&回復能力により良くなる可能性も有るという事、又手術しても再発する可能性も有るという事であった。また仕事の関係（新プロジェクトを今抜ける訳にはどうして出来なかった）や入院生活の苦しさ等の色々な事を考えて、通院しながら苦闘の日々を耐え忍のぶ事にした。もうその苦しさ痛さと言ったら言葉では言えない。半年間は腰から右足までが痺れていて余り感覚がなかったし、起きている事さえも辛く100mも歩くことができなかった。

その後11ヶ月余を経過してどうにか山歩きができるかな？と云うところまで回復してきた。とてもとてもあの苦しみに満ちた状態では、山登りなどはとてもとても考えられなかった。そんな体調なので一抹の不安は非常にあったが、しかしリハビリを兼ねて行ってみようかな～なんて思ったのも、実は後藤ふたばさんの『チベットはお好き？』なる本を読んだ影響かも知れない。彼女は、成都、ラサ、ポタラ宮殿、カトマンズ、シミコット、プラン、そしてカイラスと一人で旅をしてきた勇敢な女性であった。そんな彼女に、心動かされた訳で……。私も単純な人間で、すぐ影響されてしまう訳です。彼女の書いた本を読んでいると成程、成程と考えさせられたり、感じたり、まるで自分も一緒に行った様な気持ちになるから不思議です。

私も行ってみたいな～憧れのカイラス。五体投地するチベット仏經。以前何かで読んだシャンバラ（地下空洞に広がる理想世界）が有ると言われるチベット。チベットには『チベットの死者の書』なるものが有ります。それによると、人は頭頂のプラズマの開き口と九つの開き口が有るという事で、もし死者の魂が、死の瞬間にプラズマの開き口から逝去すれば解脱を得られ、もし他の開き口から逝去すれば、六道（天上界、阿修羅界、人間界、畜生界、餓鬼界、地獄界）のいずれかの世界に生まれ変わらなければならず、首から下の開き口から魂が逝去すれば、畜生界、餓鬼界、地獄界に落ちなければならないという事である。まあ、いろいろ興味を持って調べてみるとチベットは奥が深くそして、とても不思議な国。

とにかく出かけるにはどうすればいいかな、日数は何日必要か、会社の休暇はどうやって取るか、コースは、まずは計画を練らなくちゃいけないなあ～。いや待てよ、その前にトレーニングしなければ体をもとの体力に戻さなくちゃ等と、私の頭の中の128ビットのCPU（人に登れて俺に登れねえ訳あんめえ回路）が動き始めたのでありました。

当日の集合場所は、21時に平河ヒューテックとの事。私の会社の正門前で落ち合う事になった。奥多摩に行く場合は通り道なので、私としては嬉しい限りである。約束の時間に会社に着くと、もうデリカが停まっていた。車を駐車場に停めて荷物をデリカに積もうと近づいてみると、どうも2人いるではないか？、古山さんがいたのである。『話が違うぞ！彼氏とは連絡が取れなかったんじゃないか？？？…。』どうも又はめられたような気がするが、そこは温厚で人間が出来る私には、一言もそれには触れず車に乗車したのであった。私は後ろに座り後はいつものコースを奥多摩へと向かったのです。日原川を登り、川苔橋を渡り、入渓地近くの所に車を停めた。近くにはやはり登山者と思しき車が止まっていた。そしていつもの恒例の一杯をあおり仮眠した。

翌日の早朝、川辺ではキャンパーがいて和気相合に楽しんでいた。天気は上々、早速入渓準備をする。車の所で準備をしていると、何人もの登山者が登っていった。流石にこの時期は、入渓する人はいないらしい？。準備も出来、3人で入渓地に向かう。最近はいつも本図、古山両大先生に連れていってもらっているように思う。

入渓後は、なるべくへつって水に漬からない様に遡行していたが、やはり出てきた。目の前に10m2段の滝が現れた。仕方ないかと水に漬かる覚悟をする。下段3mは右を直上、上段7mも直上し、平凡な河原状の所を行くと大石が現れた。その先の沢はゴルジュ状になってくる。大石の先は3m位の滝が、2つ出てきて、右から大ダワ沢が入りこむゴルジュを抜けると、又沢は平凡な流れになる。そして6m滝、3段15mの滝とすべて古山さんの華麗な登りを見てスムーズに遡行して行く。ウスバ林道が横切っている所で小休止。久しぶりだからか？楽しかったからか？ここまで1時間位しかかかっていない気がするが、実際はも～っとかかっていたのだが……。今日は調子が良い。少々腰はうずくが何て事はない。このまま最後まで行けそう。行動食を食べていても、気分はもうチベットの空の彼方へと飛んでいる。

後半戦は平凡になり8mの滝を越え、少し行くと二俣となる。まずは右俣の20mの滝を右から登り滝を登攀後、プッシュを頼りに左俣のほうへ下降する。

左俣の大滝も古山大先生が美しいムーブを見せ付ける様に余裕でクリアして行く。後は単調な登りで、本図、古山氏にかなり差をつけられ、川苔山への登山道に出た。

私が、登山道に出てようやく彼らに追いついたと思ったら、本図さんは頂上に行ったという。古山さんだけが一人待っていた。二人で登山道の傍らで、持ってきた行動食を食べようかと座っていたら、一般登山者（中高年のおばちゃん等）が我々の装備を見て『何処、木登りしてきたの』などとふざけた事をのたまう。

『ふざけんじゃねえ、この御方をどなたと心得る、恐れ多くも天下のアルパインクライマー古山大先生なるぞ』との友好的な和やかな会話が交わされた。

そうこうして本図さんも無事帰還してきた。葉が落ちて閑散としている登山道を、落ち葉を踏み締め晩秋

の清々しい風をまといながら、私たちは帰途に着いた。

久しぶりの山歩きは楽しかった。確かに急な登りを登るのは嫌になってくるけど、そんな事より清々しい空気を吸い自然の中にいると、チベット仏経でいうクリヤー・ライトを体験しているようになり、心が開放される気がします。これからも精進して“ふたばちゃ〜ん”の様にチベット、ネパールを旅したいなあ〜、ついでにヒマラヤも…。

コースタイム

竜王橋 (8:40) - 逆川出合 (8:45) - ウスバ林道 (10:55~11:10) - 右俣20m滝上 (12:00)
- 左俣を経て稜線デボ (13:10) - 川乗山 (13:20) - デボ地 (13:45) - 百壽の滝 (14:30)
- 細倉橋 (15:05) - 竜王橋 (15:10)

(生井 記)



逆川右俣20m滝を登る生井

太刀岡山正面壁ルート

1995. 11. 9

パーティ L本図一統、古山正文、告広道

土浦に集合し、山梨県昇仙峡近くの太刀岡山を目指す。深夜到着し、軽く酒を飲み寝る。

翌日、取り付きまですぐ近くな事とピッチ数が短いので、ゆっくり準備して出発する。別荘らしき物の脇を通り取り付きに向かって歩きますが、『何でこんな所に建てるの?』ってな感じにあまり立地の良くなさそうな場所に四つばかり窮屈に並んでいる。もし自分だったら50万円だと言われても欲しくない。もっともくれるなら話は別だが。

間近で見る太刀岡山は、初心者ならとても登れないだろうと思う位に切り立っていて、結構荒々しい。歩きながら壁を見ていると、何か丸い物がハングの下にぶらさがっている。どうもスズメバチの巣らしい。よく見るといくつもぶらさがっており、かなり大きい物もある。別に家に持って帰ってどうするでも無いが何となく欲しくなった。ヤブの中に入り正面壁ルートの取り付きに着く。フリーで1ピッチ登り、いよいよここから人工登攀のピッチに入る。

古山氏トップで行くが落石がひどい。その内の1個が本図氏の肩に直撃してしまう。人工登攀のピッチを2ピッチ登り終了。頂上で食事をしてから近くの岩でフィフィの使い方などの講義をもらう。帰りの際に本図氏あたりが、スズメバチの巣を取っていこうと言い出すかと期待していたが、そのまま車に戻り茨城に帰る。

(告 記)



太刀岡山・正面壁ルートを登る古山氏

富士山ビバーク訓練

1995. 11. 25~26

パーティ L古山正文、告広道

来る冬山シーズンに備えるため、富士山頂にて、耐寒、ビバーク訓練をしようという事になり富士山に向かう。翌朝5合目まで車で行き、ヤッケは着ないで歩き出す。

某アウトドアショップで買ってきた上下フリース生地を着ていたのが、大丈夫だと思っていたが、6合目辺りから風が強くなり、大事な部分の感覚が無くなってしまったので、急いでヤッケを着る。今年は雪が少ないらしく登山道が出ているのでピッチが上がってもよさそうなものなのに高度の影響か頭痛がして歩くのが辛い。休んでばかりいたのが、結局8合目までしかいけず、小屋脇にツェルトを張る。

それにしても風が強い。ツェルトの中でくつろげるかと思ったが、風であおられてローソクの火がすぐに消えてしまう。やることも無いので食事をして横になる。しかし、寒さと頭痛で眠れず、何錠も頭痛薬を飲んだがダメで結局朝まで眠れなかった。

翌朝、頂上へ行こうかと思ったが頭痛がひどく、二日酔い状態だったので諦めて六合目付近で雪上訓練をしている本図氏達のところへゆっくり下っていった。

(告 記)



《雪上訓練》 富士山にて

1995. 11. 26

パーティ L 本図一統、今井弘、笹平孝、大崎真奈美

協同病院の駐車場にPM9:00に集合しまして、超新人の私は本図さんによる装備チェックをして戴いた後、“超高級紳士仕様”デリカに乗り込み出発しました。

前日、古山さんと告さんが頂上に登られる際、張り残して置いてくださったテントに到着する。お二人との無線連絡もついて一段落。

あれよあれよという間にテントにはお酒とおつまみが並び、就寝前の束の間のくつろぎタイムとなりました。(後で思うと束の間だったのは睡眠時間だった。)

翌朝、6:30頃、滝沢林道を5合目まで車で登りそこから装備の装着をし、6合目まで移動しました。

訓練に適したなだらかな斜面で早速アイゼン歩行と、登山靴のみでの歩行、登り降り、耐風姿勢等を教わり、間もなく“滑落停止”に入りました。ここは緩やかな斜面だし、停止する心構えでいますから何とかやれましたが、いざというとき果たしてピッケルから手を離さないでいられるかは非常に疑問です。

そうこうするうちに、古山さんと告さんが8合目から降り来て合流、今度は全員でロープを使つての確保の練習です。皆全員一通りのバリエーションをこなしていききました。

私は、ここで何度も古山さんを殺してしまいました。これ以来、古山さんは私と口を開いてくれなくなりました。…悲しい涙。…というのは冗談ですが、これがやり直しのきかない時だったらと思うと(その為の練習なのは十分承知してますが)少し胃の辺りが冷たくなってしまいました。

そして車に戻り、帰途につきました。今回の雪上訓練は、大自然を満喫し、雪山での恐さ、楽しさを身体で感じた一日でした。

大崎の独言

…次回は、シュラフを袋より小さくたためるように練習しておきます……………。

(後日ようやくそれが出来るようになった頃、通常はその1/3にしてザックに入れる事を知らされる事になりました。)

(大崎 記)

《ラッセル訓練》谷川岳・田尻尾根

1995. 12. 10

パーティ L本図一統、古山正文、告広道、笹平孝、今井弘

12月10日、剣岳・早月尾根を登る古山、告、笹平君達と本図さん、それに今井の4名が、下館市役所駐車場に22時に集合した。目的は軟雪のラッセル訓練。私はラッセルが大嫌いなのである。本図さんからラッセルはコツがあるんだと聞き、参加する事にした。

12月11日、国道50号線から国道17号線を通り谷川岳に向かう。湯桧曾温泉辺りから雪道になる。午前1時にロープウェイの駐車場に着いた。

駐車場には、私達の他に車が3台駐車しているだけでガラガラである。我々はすみっこの方にテントを張った。

翌朝、テントから出ると「コレデモカ」という位に車が入っていた。集金係のおじさんがやって来て、テントも駐車料金を取られた。おじさんが集金に来る前にテントを撤収すれば無料…？だったかも知れない。

8時頃テントを撤収して出発した。ロープウェイのゴンドラはスキー客でいっぱいだ。私達はロープウェイの下を歩いた。西黒沢は圧雪車のキャタピラの跡があり、歩きやすかった。二つ目の沢で本図さんが、『第一連隊、止まれ！』とストップをかけた。ここで本図連隊長殿が地図とコンパス（磁石）を使い、現在地の見方のレクチャーがあった。1時間位歩いた辺りで、今日の訓練目的であるワカンジキを着けて右側の尾根を登った。雪は膝位である。トップの古山さんは快調に飛ばす、私は古山さんの後をついて行くだけで精一杯。休みたいと思うのだが、『今井トップやれ』と本図連隊長の声。

私がトップをやるとスピードはダウンしてしまい、後ろから『おっせなあ〜』という声（テレビ波）が後頭部に突き刺さる思いである。

天神平スキー場が近づいて来た。スキー場ではスキーをする人が少なく、スノーボードが圧倒的に多くなっていた。時代の流れなのだろうか？。

スキー場を越えた辺りから訓練らしくなってきた。雪は膝上位。また私がトップを歩いた。歩こうと思うのだが体が進まない。ただ、思いだけが先に行くだけである。

『雪面を膝でつぶして、それから踏み込むんだよ』と本図連隊長殿が教えてくれた。やってみると中々良いのである。要領が分かったので、トップを笹平君に替わってもらった。彼はラッセルを楽しむかのように登っていった。まもなく頂上についた。

下りは圧雪車のキャタピラの跡を歩いて行く。1時間くらいで駐車場に着いた。

PS…帰りに湯桧曾辺りで新型デ○○が路面凍結の為スリップ事故を起こしていた。11月20日の富士山雪上訓練の帰りもデ○○が雪道でスリップ事故を起こしていた。緊張、緊張、

(今井 記)

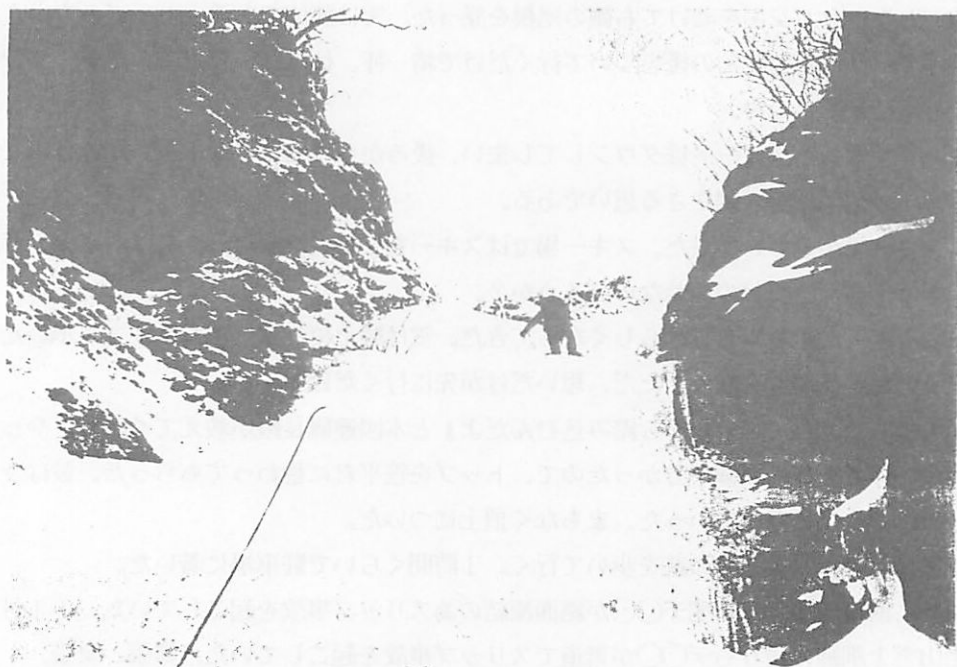
八ヶ岳 裏同心ルンゼ

1995. 12. 23

パーティ L本図一統、古山正文

今シーズン初のアイスクライミングである。クリスマス前の連休のため高速はひどい渋滞かと心配したが、幸いな事にそれは全くなかった。小淵沢から美濃戸山荘までの道には全く雪は無く、例の急勾配の右カーブもノーマルタイヤでも全く問題がなかった。最も、準備周到な本図さんの事だから、美濃戸山荘に電話して路面状態を確認済みで、その上でのノーマルタイヤだったのである。

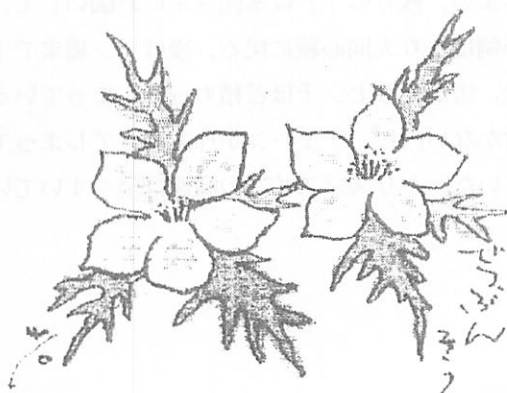
今回は土曜日曜と一泊の為テント、コッヘル等を携帯した為ザックは重かったが休む事なく赤岳鉱泉に着いた。テント場は閑散としていて、どこでも好きなところにテントを張る事が出来た。テントを張って、登攀の準備をして出発する。F1はノーザイルで通過。F2は三段になっていて長いので、ロープを出す。中段と上段にアイスクリューを一本ずつ打って抜ける。このF2上で二股になっていて、左に50m程進と12mの氷がある。ここに進む。傾斜は80度位か？空身でここに取り付く。1m位登った出だしと、真中くらいの所にスクリューを打つ。本図さんの自慢のチタンのスクリューハーケンが先がほんのわずかだが欠けていて氷に打つには一寸したコツがある。私のはクロモリ物だが片手ですると入ってゆく。これを見た本図さんは悔しがっていた。今シーズン初のアイスクライミングという事と、新しいアイゼンの氷への刺さり具



裏同心ルンゼを登る

合が良くない為に嫌らしく感じた。特に滝の落ち口付近ではスタンスの氷が崩れ両手にぶら下がるという失態を演じてしまった。右岸の木でビレー、本図さんの登りは見えないが、アッと言う間にスクリーハーケンを抜いて登ってきた。懸垂で下降し、裏同心ルンゼに戻る。F3はノーザイルで通過。F4のナメ氷はテクテクと歩いて登り、F5の手前で小休止。この間に後続のパーティが取り付く。そのトップにピッケルが抜けなくなるというトラブル発生。ピッケルを残置する為、たすき掛けにしたピッケルバンドを外さなければならず、そのためにザックを下に落とした。それを本図さんが止めてあげたのだが、その時指を脱臼してしまったらしい。なんてこった。しかしこんなことでへこたれる本図さんではない。先行のトップがセカンドのパイルを借りて登りきると、本図さんが登って行って残置ピッケルをセカンドのために回収してあげた。これを問題なく登り終了。後は大同心の基部まで登り、大同心稜を下る。今日の大同心は全く雪が付いてなく、クレッターシューズに素手で登ることができただろう。明日はこの大同心正面壁右フェースを登る予定。テントに戻り、宴会となった。

(古山 記)



八ヶ岳・大同心正面壁・右フェース

1995. 12. 24

パーティ L本図一統、古山正文

赤岳鉱泉のテント場から、大同心稜を一気に登り、一時間強で大同心基部の取り付けに着いた。今日は昨日と違って、天気は下り坂で風が強い。登攀の準備をして取り付く。厚い毛糸の手袋をしてははじめての一步がどうしてもでない。仕方なく毛糸の手袋を外し、薄手のインナー手袋で登る。数メートル登ってからあぶみを使ってトラバース気味にカンテを越す。アイゼンをつけるとあぶみに足を入れるのが非常に大変になる。ただでさえ足入れが困難なのに、風にあぶみがヒラヒラと舞ってしまい、足でそれを追っかけねばならない。さらに、八ヶ岳特有の岩質のため、ホールド、スタンスが突然剥がれる。思わず叫び声をあげてしまう。何とかバランスを保ったが、あぶみが回収できなくなり本図さんに回収をお願いしてしまった。2P目は、出だしの数メートルが難しい。3ミリの残置のシュリングを6ミリのものに換えたり、ハーケンをうちたしたりして、だいぶ時間を喰ってしまった。ピレーの本図さんはさぞかし寒いことだろう。2P終わりのピレーのボルトは大きな石に打ってあるのだが、その石が埋まっているのがテラスの足元の下で、何ともピレーしにくい。八ヶ岳特有の岩質のため絶対に剥がれない岩(石)を探すとそういう所になるのだろう。このころから岩にえびのしっぽが急速に発達しだしてくる。3P目は3級程度の所だが、アイゼンに手袋ランニングピレー点は途中一ヶ所のみ、という条件では非常に緊張した。ドームの基部まで登ってしまうと、強風の中声が届かなくなりそうなので、その手前でハーケンを打ちたしてピレーする。後は20メートル程登りドーム基部に出る。岩にしがみついて登ってきたので手がパンプしてしまい、残りの1Pは本図さんをお願いして、勘弁してもらう。次の機会にとっておこう。小同心側に下り大同心稜に戻る。後はテン場まで下り、テントを撤収する。美濃戸山荘からの車道には、雪が20センチほど積もってしまっているのでチェーンをつけて慎重に運転する。途中気が付かない内に、チェーンが片方落ちてしまっていたが、本図さんはチェーンがあるつもりで運転していた。クリスマスイブの高速は全くすいていて、4時間ほどで土浦に戻った。

(古山 記)

一流クライマーへの道

「Mさんはいつまでも山に行けていいですね」と言われることがよくある。そのあとは「俺なんか行きたくても行けませんよ」と続く。さらに「Mさんの家族は登山に理解があるからいいですね」とくる。羨ましがられているより皮肉を言われているのだろうが、私は心の中ではこう考えている。「行く気になれば誰だって行けるんだよ。行きたいという気持ちがあってもそれを行動に移すのが億劫なだけだ。飲みにも行きたい、ゴルフもやりたいではちょっと無理だ」と。自分としては山に行くために涙ぐましい努力をしているつもりなのである。現実問題として家族に3度の飯を食わさねばならないので長期の山行ができない自分が情けない。3流クライマーの私ではあるが、ここに山に行くために自分が実践している時間と金を作るノウハウを伝授しよう。

20代と違って30代40代になると、結婚子育て、そして仕事でも責任ある地位についてくることが多い。本当に山に行きたいのであれば何かを犠牲にしなくてはならない。問題を起こさずに犠牲にできるのは、自分の山以外の趣味と睡眠時間であるが、それ以上に重要なのはプライドを捨てることである。上司がバカよばわりしようと同僚が変人扱いしようとする自分の道を進むことが大切なのだ。どうせクライマーは大なり小なり変わり者なのだから。ここで断っておくが、いくら変人といっても両手が後ろに回るようなことをしてはいけない。そうになったらクライマーとしてよりも人間として失格である。

まず結婚する前に、俺は休日には山に行くんだということを繰り返し話し、彼女をマインドコントロールしておく。デイトのとき彼女にはいつも優しく接し、レストラン、遊園地、ホテルなどは絶対にいかないで自分のアパートに連れて行き、食事はコンビニの弁当で済ます。彼女にあげるプレゼントは山頂の石にする。これで彼女が山頂石のコレクターになり「今度は何処どこの石が欲しいわ」なんて言い出したらしめたものだ。そして彼女から貰うプレゼントはすべて山の道具にする。頭にくることがあっても山のためと思ってけして口や表情にあらわしてはいけない。彼女の欠点や秘密を知ってしまったも知らないふりをし続ける。他のことはどうでも、山行日とデイト日は絶対重ならないよう気を使う。それでも彼女をマインドコントロールできないような奴は、山に行っても遭難するから最初から山に行かない方がよい。

結婚してからは、平日は掃除洗濯炊事と進んで行く。自分が山に行く休日に奥様が退屈しないよう趣味をもたせる。このとき間違っても奥様を山に引きずり込んではいけない。（奥様が）中途半端に山を知ると返って（自分が）行けなくなる恐れがある。又、山を知り過ぎても行けなくなる（田部井淳子さん宅みたいに。知る人ぞ知るだが、田部井さんの旦那さんは幽ノ沢左方ルンゼ初登やマッターホルン北壁を登った名クライマーだった）。山から戻るときには山菜キノコなど山の幸を採取し、ないときはミネラルウォーター（沢水）を持って帰りご機嫌をとっておく。

子育て時期は、おむつ替え入浴は率先して行う。授乳は自分でするわけにいかないのだから、夜泣きでも奥様は寝かせておいてやる心遣いが必要だ。この時期は間違っても自分が授乳を要求することがないよう心せねばならない。なぜならば赤ちゃんのご機嫌をそこねるからだ。英雄色

を好むというから、浮気はしても良いが絶対バレないようにする。また、夜のお務めは体力が続く限り毎晩せねばならない（これに金はいらないから）。毎晩できないような体力の奴は、浮気をする資格もないし、山に行っても遭難するから最初から山に行かない方がよい。

子供教育時期には、PTA等の役員は一切やらない。役員を断ると子供の進路に影響すると思うのは間違い。優秀な子供は優秀なのである。役員をやっても少しでも良いところへという親の考えが間違っているのだ。うっかり役員でも引き受けたら大変だ。休日の用事は多いし、何だかんだと出費もかさむのだ。断れないような軟弱な性質の奴は、山に行っても遭難するから最初から山に行かない方がよい。

会社での出世は望まない。上司との一杯は行くが（支払いは上司がするだろうから）同僚との一杯はすべて断る。接待マージャンや接待ゴルフなどもっての外。休日と重なる葬式法事結婚式は欠席する。通勤は徒歩や自転車を利用し交通費を浮かす。残業はやらないで余暇は家族サービスとトレーニングに費やす。有給休暇はすべて山で消化する。窓際族を心から喜ばなくてはいけない。窓から遠く見える山を眺めながら次の山行を計画できるなんて、さらにそれで給料を貰えるんだから最高である。ややもすると奥様は同僚と比較して、凸凹さんは係長になったとか、○△さんは課長になったとか言い出すことがあるだろう。この時どのように対応するのが重要だ。課長や係長になってしまったら家族サービスはできなくなるぞ。聞くところによるといつも朝帰りだそうだ。凸凹さんや○△さんは気苦労が多く、何とか神経病になってしまい、時々「死にたい」と漏らすこともあるそうだ。俺がそうならいいのか、とか何とか言っでごまかせば良い。奥様の一人や二人をごまかせないような奴は、山に行っても遭難するから最初から山に行かない方がよい。

次が近所付き合いである。町内会だの自治会だのこれもバカにはならない。大切なのは前もって架空の親戚知人をたくさん作っておくことだ。山行日とこれらの行事が重なった時に一人ひとり死んでもらう。今日は青森の伯父さんの葬式だとか、今日は鹿児島島の叔母さんの法事だとか理由を作るのだ。たくさん作っておかないと同じ人が何回も死んでしまうのであるべく多く作っておく。過去に当会にも同じ叔父さんを何回も殺してしまった会員がいた。こんなウソもつけないような奴は、山にいても遭難するから最初から山に行かない方がよい。

最後になったがクラブ内の行事はというと。集会、会山行、合宿はすべて参加して会費以上のものを必ず回収する。といっても会の財産をガメろというわけではない。技術知識等ということだ。クラブは講習会でもガイド組合でもない。参加し、会を盛り上げてくれば会員たる資格がない。会行事に参加できないような奴は、山に行っても遭難するから最初から山に行かない方がよい。

会員諸君、わかってくれたであらうか。こんなことはとてもできないと思う奴もいるかも知れないが、それでは一流クライマーへの道は閉ざされてしまうのだ。案ずるより即実践である。

これであなたは数年後には山岳雑誌上で名前を賑わす一流クライマーの仲間入りだ。ゆめゆめ新宿西口の地下道で、あなたとお会いすることがないよう精進していただきたい。

(M)

《○○氏の山談義》

私の登山に対する思いが、ゴム風船の中の空気が自然に抜けるように、だんだん萎んで来たのを感じているこの頃です。

しかし、何故か先輩や私達が育ってきたACC-Jへの思いは逆に強く感じています。言葉より行動第一の山屋の世界では、心配しているとか、こう思っている等と言っても無駄かも知れませんが、私の考えを少し言わせてもらいます。

ここ何年か新しいリーダーを中心に会員各自が、頑張って山に取り組んでいるのを感じますが、ある一定のレベルに達すると、その上のレベルに中々達する事が出来ずに毎年同じレベルの登攀を繰り返しているように見えてしまいます。レベルアップ出来ない一番の原因は、登攀行為だけに集中出来ないのでは無いかと私は見ています。豊かな社会になりお金と暇さえあれば、どんな遊びでも出来る世の中では、遊びは山だけにしろ等と言うほうが無理なのかも知れません。

当会にも磨けば、将来有望な人も数名います。『早く一人前の山屋になりたい奴はせめて2～3年間は山だけに熱中しろ！』と無理を承知で言いたい。そして各自が海外での登山を目標として持ってもらいたい。自分が目標に向かって何をしたらいいか考えて行動し、駄々何となく山に行くのでは無く、一回、一回の山行が目標に近づく為の山行であってほしい。

技術的なことでは、もっと人工登攀の練習しなければと考えている。最近はフリークライミングが幅を利かす後時世となり、人工登攀を軽視する傾向が気になる。軽視するのではなく練習する場所や機会に恵まれないのかも知れないが、アルパインクライミングを目指す我々にとって人工登攀も重要な技術の一つなのでしっかりと身に付けてもらいたい。当会においてグレードの高いルートが最近登れないのも人工登攀の練習不足だと私は見ている。

最後に、私が入会した当時（20年前）の話ですが、前年の正月合宿で滝谷のルートに登ったそうです。その時に創設会員達は涙を流し喜んだと聞きました。今私も会の代表として同様な感動の涙を流してみたいと思っています。

（鯉河仁志 記）

《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO. 126 1995. 10 B5 38P 浦和浪漫山岳会

会越・鍋倉山笠倉山下山遅延報告、お局様たちの闇闘、みっちちゃんのキノコ教室、剣沢大滝登攀、川内・笠堀川光来出沢シンズ沢・栗ヶ岳、下田・加茂川小俣沢・栗ヶ岳、下田・大俣沢・栗ヶ岳、南会津・黒谷川西実沢ほか

◎Rohman NO. 127. 1995. 11 B5 26P 浦和浪漫山岳会

奥秩父・入川真の沢、栗駒・保呂内沢・山猫森、胆沢川小出川粕沢・岩ノ目沢、大荒川ム沢・松平山、五頭・小倉沢ハゲ沢・五頭山・西小倉沢・東小倉沢・五頭山ほか

◎Rohman NO. 128. 1995. 12 B5 44P 浦和浪漫山岳会

巻機山、富士山雪上訓練、川内・鍛沢右俣・鍋倉山・戸沢左俣・右俣・左俣・笠倉山・蟬ヶ平、総会資料、年間計画、会員名簿、95年度山行一覧、会則、会計報告ほか、いつも感じることだが、高桑氏による寄贈会報寸評が的を得ていて実におもしろい、だから当会の粗末な機関紙を見られるのが恐くもある。

◎月報・ZAC NO. 165 1995. 8 B5 16P グループ・ゼフィルス

朝日連峰・入リソウカ沢、奥秩父・笛吹川東沢、西のナメ沢、西のナメ沢前沢、那須連峰・苦土川井戸沢、飯豊連峰・胎内川本源沢、湯桧曾川・袈裟丸沢ほか

◎月報・ZAC NO. 166 1995. 9 B5 18P グループ・ゼフィルス

奥秩父・大洞川井戸沢桂谷、奥秩父・一ノ瀬川源流部、巻機山・米子沢、奥利根・ナルミズ沢、南会津・硫黄沢、奥秩父・赤ノ浦川ホトケ沢、滝ノ沢、笛吹川青笹川ほか

◎月報・ZAC NO. 166 1995. 10 B5 14P グループ・ゼフィルス

朝日連峰北部縦走、南ア・大井川関ノ沢・大無間山、玉原高原きのこコンパ、八ヶ岳ハイキング、木曾谷最後の行商人、いくら食べても太りにくい体質になるダンベル体操ほか

◎わらじ NO. 475 1995. 10 B5 10P わらじの仲間

会務報告、続夏合宿報告、アマチュア無線のマナーほか

◎わらじ NO. 476 1995. 11 B5 22P わらじの仲間

秋の集中特集 佐梨川桑ノ木沢、大チョウナ沢、水無川北沢、モチガハナ沢、北俣川滝ハナ沢、白沢、三国川栃ノ木川コウガイ沢ほか

◎わらじ NO. 477 1995. 12 B5 12P わらじの仲間

鎌房山きのこと採り、苗場山・清津川サゴイ沢、ほか

◎逍遙 NO. 53 1995. 10 B5 29P 逍遙溪稜会

朝日・金目川左俣、朝日川朝日俣沢・上ノ大沢、荒川石滝川・岩井沢、丹沢・玄倉川小川谷廊下、奥多摩・水根沢谷、日原川樽沢、袖沢ヨシスキ沢左俣、谷川・湯桧曾川大倉沢、東黒沢白毛門沢、マチガ沢、鷹ノ巣B沢、C沢、越後・三国川日向沢、奥秩父・丹波川小常木谷ほか

◎逍遙 NO. 54 1995. 11 B5 21P 逍遙溪稜会

谷川・東黒沢本谷丸山沢右俣・ウツボギ沢、奥多摩・丹波川ジゴク谷、カマクラ沢、川苔谷逆川、甲斐駒ヶ岳尾白川黄蓮谷右俣、秩父・大皿川西谷ワレイワ谷、巻機山登川米子沢、奥只見・大鳥川滝沢、叶津川小三本沢、ほか

◎逍遙 NO. 55 1995. 12 B5 20P 逍遙溪稜会

裏妙義・入山川裏谷急沢、奥秩父・大荒川谷・中ノ沢、大洞川井戸沢・惣小屋谷、奥多摩・盆掘川千ガ沢石津窪、桐葉窪、大菩薩・泉水谷小室川谷、丹沢・中川川東沢本棚沢、本谷川キュウハ沢、

奥多摩・後山川三条沢、など、その他、平成7年度総会資料、

◎通信・植村冒険館 NO. 5 1995. 11 B5 6P 植村記念財団

仲間が語る植村直己、山岳指向アンケート集計結果ほか

◎Next! 月報準備号 1995. 12 B5 24P 山岳溪流釣り集団むげん

集会報告、活動報告(朝日連峰・八久和川遡行、只見・叶津きのこ狩り)、みちのり(会員の近況報告)ほか、1996. 1に月報として創刊号が発刊される予定

会報

◎野良犬通信 Vol. 1 1995. 3 B5 26P チーム野良犬

青島靖氏の山行記録集、山行回数内容とも大変素晴らしい、台湾・大崙溪~卑南主山、白山・医王山、赤兎山、野伏ヶ岳、大日ヶ岳、大日山、小白山北峰、大嵐山~鳴谷山~青柳山、銚子峰~小白山、白馬・清水谷、金山沢などの山スキーの記録多数と経ヶ岳北西稜ほか

◎野良犬通信 Vol. 2 1995. 3 B5 36P チーム野良犬

Vol. 1と同じ様にカラー写真入りの素晴らしい出来栄え、敦賀・耳川うつろ谷、白山・打波川ゴトゴト谷、打波川松谷、牛首川小倉谷、蛇谷岩底谷、トクズレ谷、フクベ谷、ジライ谷、大日沢、中ノ川地獄谷、犀川倉谷川、境川オバタキ谷、南紀・黒蔵谷、鈴鹿・神崎川本流、九州・由布川溪谷、宮崎の岩場、谷川・笹穴沢、西ゼン、北ア・称名川ザクロ谷、黒部上の廊下、猫又谷、奥美濃・川浦谷海ノ溝谷、御嶽・濁河榎谷、飛越・うぞお谷ほか

◎年報わらじ No. 18 1994年度 B5 249P わらじの仲間

夏合宿 飯豊連峰・実川前川本流、頼母木上ノ小俣沢、北股川鮎倉沢、冬合宿 北ア・北鎌尾根、赤沢岳西尾根、春の集中 奥秩父甲武信岳周辺、秋の集中 大源太山周辺、サブ合宿 八ヶ岳赤岳横岳周辺、白神・追良瀬川、朝日連峰・岩井俣沢ガッコ沢、飯豊連峰・玉川檜山沢、栗駒・産女川、吾妻・滑川大滝沢、中津川、御神楽岳・本名穴沢、大室谷川蕎麦谷、会津朝日岳・楢戸沢、川内・中杉川、早出川、下田・光来出沢、越後・水無川オツルミズ沢、北ノ又川中荒沢右俣、谷川・仙ノ倉谷東ゼン、西ゼン、万太郎谷、西黒沢、幽ノ沢左俣中央ルンゼ、尾瀬・硫黄沢、那須・阿武隈川南沢右俣、両神山・金山沢八丁沢、奥多摩・峰谷川長久保沢、水根沢谷、川苔谷逆川、丹沢・水無川本谷、小川谷廊下、信越・白砂川魚ノ沢、北ア・黒部川赤木沢、上越・足拍子川前手沢左稜、八ヶ岳・小同心クラック、赤岳ショルダー左、日ノ岳稜、阿弥陀岳中央稜、頸城・戸隠西岳P5V稜、北ア・五竜岳GⅦ、鹿島槍荒沢尾根、南ア・甲斐駒ヶ岳赤石沢中央稜、Aフランケ、台湾・玉虚峰、ヒマラヤ・ムスターグアタほか記録多数

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

早いもので、編集を担当してから早2年半。まだまだ締め切りには大幅に遅れて発行していますが、大分なれてきました。ここで今までの労力を癒やしたい事と、少し気分転換にと一人ヒマラヤに行こうかなあ、見るだけでも良いからと考えている今日この頃です。

あ！。そうだ。そうだ。今回、また新人が入会されて又々変わっていきつつあるACC-J茨城です。今回入会された新人の方に一言。今、入会されるともなく、入会の抱負の文を書けますので、期待して考えておいてくださいね。

それでは、もしヒマラヤに行けたら報告しますね……。と一人旅立つ編集長であった。

(編集長)



季報 [R&V] 第19号 発行1995年 秋号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-05茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷

